

復興を歩む

vol.9

いいたてまていな太陽光発電所

いいたてまていな太陽光発電所の建設工事が大詰めを迎え、3月末の竣工に向けて、道路の整備や機器の試験調整が行われています。

建設工事は、村が所有する大火山の遊休地で、平成25年から約2年間の工期で進められてきました。およそ14ヘクタールの用地に、「西エリア」「東エリア」「北エリア」が設けられ、3エリア合わせて約4万5000枚の発電パネルは、すでに設置が完了しています。各エリアで発電する電気は、地中の送電ケーブルを通じて連系変電所に集められ、東北電力の送電線へと送られます。

発電した電気は、「再生可能エネルギー」の固定価格買い取り制度」に基づき、東北電力が20年にわたり1キロワットあたり40円に消費税を加えた価格で全量を買います。また事業計画では、買い取り期間の終了やパ

ネルの劣化に伴う事業終了の際の設備撤収までを含んで、収支を計画しています。村は、この発電事業の主体である「いいたてまていな太陽光発電株式会社」に、東光電気工事株式会社と共同で出資を行って、村に分配される収益金は復興事業に活用する予定です。

「いちばん館」に隣接する「陽だまりの家」に、現場仮事務所が置かれています。事務所を預かる東光電気工事現場代理人の堀尾明正さんは、「線量管理を行いながら、ピーク時には170人位の人が作業にあたっていました」と夏場の工事を振り返ります。その夏場の作業を妨げないよう、ケーブルを通す配管の埋設工事を進めたのは厳冬期。9月の豪雨では周辺の道路が寸断されるなど、外からは見えない現場の苦労は続きました。「その都度、役場に相談しました。不足するコンクリートの手配や、大岩に発破をかける作業などには、地元の業者さんの協力も。皆さんの協力なしでは進みませんでした」。

本格稼働は4月からの予定。最大で1万キロワットの発電を行います。

3つのエリアの中で最大の「西エリア」。数日前の残雪が見えます。パネルは4段7列28枚で1組(1アレイ)を形成。斜面を埋め尽くすように、すべてが南向きに並べられています。また、広大な発電所の計測や監視には、発電量や機器の状態をパソコン上で確認できる「ストリング監視システム」を採用。天候などの影響で変動する発電量は、大火山のふもとに近い連系変電所の立て看板にも表示されます。